一章

一節

（1）袴谷氏の『本覚思想批判』の十六章には「道元に対する『全一の仏法』的理解の批判」と題して、衛藤即應氏が使った「全一の仏法」という言葉が、教禅一体として仏道の全てを含むという意味になって、正邪弁別を曖昧にし「仏心宗」もそこに含ませ得るかのごとく説かれることに対しての、《仏道》を引用して批判がある。だが、『弁道話』では「五家ことなれども、ただ一仏心印なり」という言い方もあって、「仏心宗」とつながる語感をもつ。また、「全一の仏法」を継承して使った榑林皓堂氏が、教説以前の言葉を離れた「正覚（さとり）」としていることに、袴谷氏は異議を立てている。たしかに教外別伝は後の道元が批判することであるが、『弁道話』の「仏法の全道」では、道元自身が、教外別伝的意味合いで使っているといえる。用語を厳密に使うべきだという袴谷氏の意見に異論はないが、道元自身が思想的に絶えず変化していて用法や意味合いを巻によって変えて使っていることが多くあるので、それを考慮するべきであろう。

（2）増谷文雄『臨済と道元』（春秋社、1971）

（3）「思想読本・道元」四三頁（法蔵館、1964）

（4）ここでは『景徳伝燈録』に正系として載せられた禅の祖師方をいう。

（5）筆者は道元の思想を四期に分けて、帰朝後、興聖寺開単まで（三十三才）を初期、興聖寺時代（三十四才から四十四才）を中期、越前移住（四十四才七月）から鎌倉下向（四八才）までを後期、鎌倉行から示寂（五十四才）までを晩期とする。

（6）たとえば、山内舜雄『道元禅と天台本覚法門』（大蔵出版、1985）、『道元禅の本流』（榑林皓堂、大法輪閣、1980）、『道元禅の歴史』（竹内道雄ほか、春秋社、1980）など。

なお、柳田聖山氏に、「道元禅」という言葉は、もともと鈴木大拙が白隠禅、盤珪禅と並べて使ったのが始めであるとの、ご指摘を受けた。

（7）石井修道『道元禅の成立史的研究』七四九頁、（大蔵出版、1991）

（8）袴谷憲昭『道元と仏教』三八頁（大蔵出版、1992）

二節

（9）『道元』上二二頁頭注（日本思想体系、岩波書店、）なお柳田聖山氏によれば「senika」の音写で、有軍、勝軍と訳され、『涅槃経』第三九が出典である。（『初期禅宗史書の研究』1967、禅文化研究所、第三章七節注二）

（10）金倉圓照『インド哲学史』一〇七頁（平楽寺書店、1973）

（11）同右、十三頁

（12）柳田聖山「道元と中国仏教」四十頁（「禅文化研究所紀要」十号、1984）

三節

（13）石井修道　前引書、一七四頁

（14）『祖堂集』巻三、六三頁、（中文出版社、1984）

（15）『祖堂集』巻三、六四頁

（16）鎌田茂雄、『宗密教学の思想史的研究』三五〇頁に所載されたものによる。（東京大学出版会、1975）

（17）石井修道「裴休拾遺問」上、三三頁（「禅研究所年報」、二号、1993）

（18）前引書、四六頁

(19) 前引書、三七頁

(20) 森本和夫氏は「誤りを誤りとすること・・・綿密な検討」とする（『正法眼蔵を読む』五四頁、春秋社、1988）。それでいいのだろうが、もう一歩、「錯」に言葉をめぐる否定、肯定両面を含意しているように思う。また、玉城康四郎『道元』（中央公論社、1983）では「将錯就錯」を「純一無雑」としているが、適当ではなかろう。

(21) 田村芳朗氏はこれを「悪しき自然外道」と解釈し、インドの無因無果論・運命論であるとするが、ここでは運命も因果もなにも言及されておらず、むしろ田村氏が本覚思想として語ってきたものこそ道元が「自然外道」と批判しているものであると思われる。（『道元思想の特徴』所収「道元の本覚思想」九一頁（1971年、春秋社）

(22) 入矢義高編、『馬祖の語録』、四五、四六頁

二章

一節

(1) 『碧巌録』上、岩波文庫（朝比奈宗源訳注）第四則、七七頁

(2) 『神会和尚遺集』一三四頁（胡適校、胡適記念館、民国63年）

(3) 『景徳伝燈録』九一頁（新文豊出版、民国63年）

(4) 『景徳伝燈録』前引書、九一頁

(5) 『祖堂集』前引書、一〇九頁

(6) 柳田聖山『大乗仏典・祖堂集』、二〇一頁（中央公論社、1990）

二節

(7) 増谷文雄『臨済と道元』、一五頁ー八九頁（春秋社、1971）

(8) 伊藤秀憲「『正法眼蔵』に見られる臨済批判」一三一頁（宗学研究」20号、駒沢大学、1978）

(9) その他、最初に「観音導利興聖宝林寺」と書いてあること、下巻だけの真筆本が熊本広福寺にあることからも、別に作成されたものだといえる。

(10) 「示衆」ではなく、「書」とあるもの、四巻、あるいは「記」とあるもの四巻、何も記述されていないもの三巻、合わせて十一巻。

(11) 芙蓉に関しては、〈これすなはち祖宗単伝の骨髄なり。高祖の行持おほしといへども、しばらくこの一枚を挙するなり。いまわれらが晩学なる、芙蓉高祖の芙蓉山に修練せし行持、したひ参学すべし〉といわれて、宗派意識が垣間見える。

(12) 『典座教訓』には、まだ船にいた道元が、育王山の老典座に笑われたことが記されている。「座大笑して云く、外国の好人、未だ弁道を了得せず」。（『道元禅師全集』第六巻一五頁）

(13) 河村孝道「正法眼蔵の成立史的研究」（駒沢大学仏教学部研究紀要第38号）

(14) 伊藤秀憲氏は、同じ《山水経》で雲門が低く評価されている所と、「古仏云く」と高く評価されている所があると指摘するが（前引書一三〇頁）、この場合も行と法ということではない。

三節

(15) 古田紹欽『思想読本・道元』四三頁（法蔵館、1984）

(16) 石井修道『道元禅の成立史的研究』から引用した。（前引書、九五、九六頁）

(17) 柳田聖山「道元と臨済」八三頁（「理想」No513所収、1975、理想社）

(18) 山折哲男「仏教」NO10、二二頁（法蔵館、1990）

(19) 柳田聖山「道元と臨済」前引書　八五頁

(20) 古田紹欽、前引書　四三頁

(21) 柳田聖山「道元と臨済」前引書　八七頁

(22) 石井修道、前引書、二〇〇頁ー二〇七頁

(23) 如浄の言葉が引用されるのは、九月〈仏道〉〈仏経〉〈諸法実相〉、十月〈無情説法〉〈陀羅尼〉〈面授〉、十一月〈梅花〉〈見仏〉〈遍参〉、十二月〈眼睛〉〈家常〉〈竜吟〉であり、如浄について言及されるのは、〈洗面〉（再示衆）〈十方〉である。

(24) 石井修道、前引書　八頁

(25) 石井修道、前引書、一九〇頁

(26) 『祖堂集』巻五、前引書、一一八頁、読みは石井修道氏による。

(27) 『祖堂集』巻五前引書、一〇〇頁、読みは石井修道氏による。

(28) 柳田聖山「道元と臨済」前引書、八二頁

三章

一節

(1) 志部憲一氏は、「道元禅師の臨済批判について」において、『正法眼蔵』（〈仏向上事〉〈葛藤〉〈密語〉）で臨済の批判が突然出てくるので、江戸時代の天桂は『辨註』で、それを妄添として削除しており、また経豪は『如何ナル子細ヤアラン』と疑問視していると指摘している。また面山・指月・瞎道・蔵海には臨済批判がないという。（「宗学研究」、22号、駒沢大学、1980）

(2) 『臨済録』入矢義高訳注、岩波文庫三九頁以下（岩波書店、1989）

(3) 「人」は無と合わせて「無依の道人」（5回）「無位の真人」（4回）無事の人」2回の他、「真正学道人」3回等と使われている。」

(4) 『臨済録』前引書五四頁

(5) 『臨済録』前引書、六四頁

(6) 『臨済録』前引書、二〇頁

(7) 『祖堂集』巻五前引書一〇〇頁

(8) 『伝心法要』（『講座・禅』第六巻一三四頁、筑摩書房、1974）

(9) 石井修道『中国禅宗史話―真字『正法眼蔵』に学ぶ』、四九九頁（禅文化研究所、1988）

(10) 『臨済録』前引書一三二頁

(11) 『臨済録』前引書一〇一頁

(12) 臨済の好んだ「無」は、他にも「無事」を二〇回、「無依」を七回、「無生」を五回と多用される。

(13) 『臨済録』前引書、一二三頁

(14) 『臨済録』前引書、六一頁

(15) 『臨済録』前引書、五九頁

(16) 『臨済録』前引書、三七頁

(17) 『臨済録』前引書、二七頁

(18) 『臨済録』前引書、五四頁

(19) 『臨済録』前引書、九八頁

(20) 他にも「道流、諸方に説く、道の修すべき有り、法の証すべき有りと。你は何の法をか証し、何の道をか修せんと説く。你が今の用処、什麼物をか欠少し、何の処をか修補せん」『臨済録』（七九頁以下）など。

(21) 『老子』六三章（『世界の名著』4中央公論社、一三四頁）

(22) 『臨済録』、前引書七四頁

(23) 『臨済録』九二頁、一二八頁、八五頁、一二一頁、一四一頁には「不如無事」とあるほか、「不如休歇無事」（九九頁）「不如一箇無事底阿師」（一四一頁）

(24) 『臨済録』前引書、九六頁

(25) 『臨済録』前引書、五六頁

(26) 『臨済録』前引書、三五頁

(27) 『臨済録』前引書、九〇頁

(28) これを日本達磨宗への批判と見る人もいるが、大慧宗杲はこれを引用しているのだから、宋代主流の考えと見てよいと思う。

(29) 石井修道『道元禅の成立史的研究』前引書一八一頁、注36

(30) 『臨済録』前引書、五〇頁

(31) 志部憲一氏によれば、詮慧は《神通》聴書で、無相など臨済の「無」という表現が批判されていると見る。（前引書）

(32) 『荘子』大宗師篇に多く用いられる。たとえば「且れ真人ありて、爾る後に真知あり」（岩波文庫『荘子』第1冊、一七三頁）

(33) 『臨済録』前引書、一四六頁

二節

(34) 柳田聖山編『祖堂集』三六三頁（中文出版社、1990）

(35) 道元が『正法眼蔵・三百則』に引用する臨済の問答は十則であって、最高の趙州十五則には及ばないが、すべて百二十七人中六番目に多い。

(36) 柳田聖山「道元と臨済」八七頁（「理想」No513所収 1975、理想社）

(37) 『臨済録』前引書三一頁以下

(38) 『臨済録』柳田聖山、七〇頁（仏典講座30、大蔵出版、1972）

(39) 『臨済録』岩波文庫九二頁以下

(40) 上の上・中・下と、中の上・中・下および下の上・中・下であり大きく分ければ三種の根器である。入矢訳では、最初が中根と下根に別けられるが、私見によれば九種の内、中下、中上、上上の場合を取り上げている。

(41) 『臨済録』岩波文庫一一二頁

(42) 『臨済録』岩波文庫、四四頁以下

(43) 『臨済録』岩波文庫、四五頁、また臨済は四喝（『臨済録』勘弁21）三法身（『臨済録』三六頁）など、とにかく分類が好きである。

(44) 『臨済録』上堂九に、「師又云く、一句語に須く三玄門を具すべくして、権有り用有り」といわれているが、具体的にはわからない。他にも三法身を立てたり臨済はやたらに分類する。

(45) 『臨済録』岩波文庫、一五六頁。これは、『臨済は小僧っ子ながら、いっぱしの目をもった子だ』と、訳されている。臨済と一緒に他の二人が悪口をいわれていること、これに対し臨済が「這の賊」と応対していることから、一隻眼も悪口であったと思われる。

(46) 『臨済録』岩波文庫、九三頁

(47) 『臨済録』岩波文庫、九八頁

(48) 『臨済録』岩波文庫、二一一頁

(49) 雲門三句とは、一函蓋乾坤。二截断衆流。三、随波逐浪である。（芋坂光龍「中国における禅の展開」（『講座禅』第三巻所収）

(50) 石井修道『道元禅の成立史的研究』三章四節二一八頁以下

補注 なお、この節と通ずる指摘がすでに入谷義高氏によって「表詮遮詮」という題でなされている。（『自己と超越』一三頁以下。岩波書店、1986）

三節

(51) 志部憲一氏は、江戸時代の万仞は、やはり「不浄を拭う古紙」いうような臨済の経典軽視をその批判の理由としている。（「道元禅師の臨済批判について」前引書）

(52) 増谷文雄 前引書、七五－七六頁

(53) 『臨済録』岩波文庫、九六頁

(54) 『臨済録』岩波文庫、七八頁

(55) 『臨済録』岩波文庫、八九頁

四節

(56) 「過師」については、百丈が「見、師と斉しきときは、師の半徳を減ず、見、師に過ぎて初めて伝授するに堪えたり」と褒めたことにもよろう。

(57) 石井氏は、黄檗が評価される理由として、一「高い意味の無師の坐禅を自ら受用すること」、二無所得の坐禅、三仏向上事を挙げる。(石井修道、『中国禅宗史話』四二八頁以下。禅文化研究所、1988)

(58) 石井修道『道元禅の成立史的研究』二四頁以下

(59) 『景徳伝燈録』前引書、二二一頁、一部は石井修道氏の『道元禅禅の成立史的研究』七〇頁の訳による。

(60) 石井修道『道元禅の成立史的研究』六九頁

(61) 大正大蔵経四八巻、四〇二頁c

(62) 石井修道『中国禅宗史話』二二四頁

四章

一節

(1) 百丈は、浮槎寺で大蔵経を閲覧するのに幾年か費やしたという。石井修道『宋代禅宗史の研究』一三〇頁

(2) 臨済は唯識を、徳山は涅槃経を、香厳は諸経論を学んだ。

(3) 石井修道『中国禅宗史話』五五九頁以下

(4) 石井修道『宋代禅宗史の研究』二一頁

(5) 柳田聖山『初期禅宗史書の研究』四六二頁(1967、禅文化研究所)800年頃の『血脈論』の冒頭には「三界興起、同帰一心、前仏後仏、以心伝心、不立文字」とある。

(6) 石井修道『中国禅宗史話』五五四頁

(7) 近衛殿がだれを指すか、明らかではないが、注によれば、家実とする説(中世古祥道『道元禅師伝研究』)と兼経とする説(竹内道雄『道元』)がある。

(8) 『道元禅師全集』第七巻、二五〇頁

(9) 同右、三八三頁、伊藤秀憲氏の説

(10) 柳田聖山「思想読本・道元」、前引書一四頁

(11) 石井修道『宋代元禅宗史の研究』、一〇五ー一一九頁(大東出版社、1987)

(12) 『道元禅師の引用経典・語録の研究』一〇六頁(1965年、木耳社)

(13) 『道元禅の成立史的研究』三三一頁、『宋代禅宗史の研究』三七八頁など。もっとも後者の注によると鏡島氏は『道元禅師とその門流』では、石井氏と同じである。

(14) 柳田聖山「道元と中国仏教」一〇頁(「禅文化研究所紀要」13号)

二節

(15) 『曹洞宗全書』史伝上、一三頁

(16) 杉尾玄有『宗学研究』19号、三三頁

(17) 石井修道『道元禅の成立史的研究』四四〇頁

(18) 石島尚雄「道元禅師と身心脱落」(「宗学研究所紀要」第八号)四三頁以下、なお資料は、春秋社版『道元禅師全集』二巻六〇九頁

(19) 中世古祥道『道元禅師伝研究』、前引書

(20) 石井修道『道元禅の成立史的研究』四一五頁以下。特に四三〇~四三六頁

(21) 同右、四四〇頁

(22) 『ブッダから道元へ』前引書、二一九頁

(23) 石井修道氏が指摘するように、『宝慶記』は道元の晩年に整理されたと思われる。

(24) 杉尾玄有『宗学研究』28号一九頁
(25) 『学道用心集』のほか、《発菩提心》にも〈正師に会わざれば正法を聞かず〉とある。
(26) 石井修道『道元禅の成立史的研究』三六九頁に述べられるように、鏡島元隆『天童如浄禅師の研究』や、伊東洋一『道元と如浄』（弘前大学人文学部文経論叢」第15巻第一号では、如浄が「心塵脱落」といったのを、道元が「身心脱落」と受け取ったとしている。石井氏自身もその説をとる。（四三五頁）
(27) 柳田聖山「道元と中国仏教」前引書、二二頁
(28) 『祖堂集』前引書、二七四頁
(29) 東隆真「道元の身心脱落を解読する」一二二頁（「仏教」NO10）
(30) 同右一二六頁
(31) 同右一二六頁
(32) 同右一二六頁
(33) 同右一二六頁
(34) 同右一二六頁
(35) 同右一二六頁
(36) 同右一二六頁

三節

(37) 柳田聖山「中国禅宗史」一八頁（講座「禅」第三巻所収、1974年、筑摩書房）
(38) 柳田聖山『初期禅宗史書の研究』四四二頁
(39) 柳田聖山『初期禅宗史書の研究』四三八頁
(40) 鎌田茂雄『宗密教学の思想史的研究』（東京大学出版会、1975）二三三頁
(41) 鎌田茂雄、前引書、二三四頁
(42) 石井修道『道元禅の成立史的研究』二三六頁
(43) 石井修道『道元禅の成立史的研究』一二〇頁の引用による。
(44) 石井修道『道元禅の成立史的研究』二四四頁
(45) 中島志郎「知訥の頓悟漸修論」（「禅文化研究所紀要」20号、1994）
(46) 石井修道『宋代禅宗史の研究』九四頁
(47) 柳田聖山『中国撰述経典一』二六八頁（筑摩書房、1987）
(48) 常盤義伸『ランカーに入る』二三一頁（「国際禅学研究所報告」第二冊、1994）
(49) 柳田聖山『中国撰述経典一』二四頁
(50) 柳田聖山『中国撰述経典一』七三頁
(51) 柳田聖山『中国撰述経典一』八一頁
(52) 柳田聖山『中国撰述経典一』一三三頁
(53) 柳田聖山『中国撰述経典一』二八五頁
(54) 柳田聖山『中国撰述経典一』四二頁
(55) 荒木見悟『中国撰述経典二』一八頁
(56) 荒木見悟『中国撰述経典二』九四頁
(57) 荒木見悟『中国撰述経典二』九九頁
(58) 荒木見悟『中国撰述経典二』一三七頁、そこでは「彼の外道等は、常に自然と説く。我れの因縁を説くは、彼の境界にあらず」と、『楞伽経』を引用している。
(59) 荒木見悟『中国撰述経典二』一六九頁
(60) 柳田聖山「道元と中国仏教」前引書七二頁
(61) 荒木見悟『中国撰述経典二』二一頁
(62) 石井修道『道元禅の成立史的研究』一五三頁
(63) 荒木見悟『中国撰述経典二』七八頁

(64) 荒木見悟『中国撰述経典二』一二二頁

(65) 五祖は六回言及されているが、〈五祖法演の法孫〉〈春秋〉などと関説されているものが多く、仏性法泰については、これ以外は〈春秋〉に寒熱時の公案が引用されて、〈この道取、いささか公案踏著戴著の力量あり〉と著語されているばかりである。

(66) 石井修道氏は『道元禅の成立史的研究』で、第一章を「道元の圭峰宗密批判」と題している（一―一〇六頁）が、直接的な道元思想との関わりは、ほとんど論じられていない。

(67) 石井修道『道元禅の成立史的研究』一章一節注（17）

(68) 石井修道『道元禅の成立史的研究』六五頁以下

(69) 石井修道『道元禅の成立史的研究』二二頁

(70) 石井修道『道元禅の成立史的研究』六頁

(71) 石井修道『道元禅の成立史的研究』八一頁

(72) 鎌田茂雄、前引書、一七八頁の読みによる。

(73) そのほかにも〈仏経〉に、〈また大国に帝師となること、かならずしも有道をえらばれず。帝者また有道をしりがたし。わづかに臣の挙をききて登用するのみなり。古今に有道の帝師のあり、有道にあらざる帝師おほし。にごれる代に登用せらるるは無道の人なり、にごれる世に登用せられざるは有道の人なり。そのゆへはいかん。知人のとき、不知人のときあるゆへなり。黄梅のむかし神秀あることをわすれざるべし。神秀は帝師なり〉とある。

(74) 池田魯参『道元学の揺籃』、二四・二五頁（大蔵出版、1990）

(75) 『世界大思想全集』一四二頁（春秋社、1929）

(76) 同右、一四七頁

(77) 鎌田茂雄、前引書、二三七頁

(78) 荒木見悟『中国撰述経典二』二八八頁

四節

(79) 「大慧」梶谷宗忍、（講座「禅」第三巻所収、二六〇頁）

(80) 石井修道『大乗仏典12・禅語録』、四三九―四四〇頁（中央公論社、1992）

(81) 『臨済録』前引書六一頁

(82) 『大慧語録』二二巻（大正大蔵経四七巻九〇六頁c）

(83) 『大慧語録』二四巻（大正大蔵経四七巻九一二頁a）

(84) 鏡島元隆、「如浄と道元」、一二四頁（思想読本『道元』柳田聖山編）

(85) 『清涼寺語録』（大正大蔵経四八巻一二一頁c）

(86) 『荘子』二一四頁（金谷治訳注、岩波文庫）

(87) 柳田聖山「道元と中国仏教」六六頁以下

(88) 柳田聖山、前引書、七二頁

(89) 石井修道『道元禅の成立史的研究』、七五〇頁

(90) 巻十、大正蔵経巻四九、二〇五頁a

(91) 鏡島元隆『道元禅師と引用経典・語録の研究』四二頁（木耳社1965）

(92) 池田魯参『道元学の揺籃』八六頁（大蔵出版、1989）

(93) 『大慧書』答汪状元第二書、前引書、一四八頁

(94) 池田魯参、前引書、八八頁

五章

一節

(1) 柳田聖山「看話と黙照」（「花園大学研究紀要」6号、1975）なお石井修道氏もそれを認める。（『印度学仏教学研究』第23の第25の1、（1976）

(2) 石井修道『道元禅の成立史的研究』三二六頁以下、『宋代禅宗史の研究』三六六頁以下。

(3) 石井修道『宋代禅宗史の研究』三二六頁以下には、大慧の報恩光孝禅寺の開堂には宏智が白槌し、大慧は宏智の葬礼を司り、また宏智の像に賛を書いて称賛していることが指摘されている。

(4) 『大慧書』の中で見性をいうのは一箇所だけである。すなわち「所以云、聖人設教、不求名、不伐巧、只令学者見性成道而已。」（答汪状元　第二書）、前引書、一五〇頁

(5) 市川白弦『大慧』一八八頁以下（東方出版、1941）

(6) 石井修道、『大慧普覚禅師法語』五－4（『大乗仏典十二・禅語録』）一二〇頁

(7) 石井修道『道元禅の成立史的研究』二九六頁

(8) 荒木見悟氏は、『大慧書』解説で、儒教への影響を指摘している。二六六頁以下、（筑摩書房、1969）

(9) 藤吉慈海「ベトナムの仏教」（「花園大学研究紀要」5号、1974）

(10) 『大慧書』荒木見悟訳注、一九二頁、

(11) 鏡島元隆「如浄と道元」前引書一二五頁

(12) 『大慧書』前引書、一七一頁

(13) 石井修道『中国禅宗史話』五五五頁

(14) 石井氏は、これを黙照禅と大慧のもっとも大きな相違点とする。（前引書三〇五頁）ただし、「大慧禅は待悟禅といわれる特色を持つが、悟を追求する限り正しい。しかしここにも『将心等悟』がはっきり否定されている」（三〇〇頁）という。『将心等悟』は「心をとどめて悟りを待ってはなりません」と訳されている。（荒木見悟、前引書一五五頁）が、石井氏は、明瞭に「悟りを待たず」と言っている箇所をなぜかあげない。

(15) 第六巻『道元禅師全集』（春秋社）第七巻、一五〇頁

(16) 『大慧書』前引書、六八頁

(17) 『大慧書』前引書、一五頁。「答張舎人状元」（二二六頁）など。

(18) 『大慧書』前引書、一六二頁

(19) 『大慧書』前引書、二三二頁

(20) 石井修道『道元禅の成立史的研究』前引書、五一九頁

(21) 同右、五二〇頁

(22) 同右、五二一頁

(23) 『大慧書』前引書、一五七頁

(24) 『大慧書』前引書、一七三頁

(25) 石井修道、前引書、五一七頁

(26) 鏡島元隆『天童如浄禅師の研究』ここでは、石井修道、前引書、三七〇、三七一頁による。

(27) 『大慧書』解説、前引書、二四九頁

(28) 『大慧書』前引書、二〇四頁（29）『大慧書』前引書、二二八頁

(30) 石井修道『道元禅の成立史的研究』三三〇頁

(31) 『大慧書』前引書、五四頁

(32) 『大慧書』前引書、一二七、一三二、一三六頁など

二節

(33) 『大慧書』前引書、一〇三頁

(34) 『大慧書』前引書、一七〇頁

(35) 『大慧書』前引書、一五八頁

(36) 鏡島元隆「如浄と道元」前引書一二四頁

(37) 石井修道訳注『大慧普覚禅師法語〈続〉』（上）五五頁（「駒沢大学禅研究所年報」第4号所収）、（陳県丞元霧に示す）

(38) 石井修道、訳注『大慧普覚禅師法語〈続〉』四三頁（妙明居士黄子余に示す）
(39) 『大慧書』前引書、一二八頁、一三二頁
(40) 『大慧書』前引書、一三九頁
(41) 石井修道訳注『大慧普覚禅師法語〈続〉』三〇頁
(42) 『大慧書』前引書、二七頁、八五頁、二二五頁
(43) 市川白弦『大慧』（東方出版、1941）一六九頁
(44) 市川白弦、前引書、一六六頁
(45) 石井修道『道元禅の成立史研究』三二一頁
(46) 市川白弦、前引書、一六六頁
(47) 石井修道『道元禅の成立史研究』三〇三頁、ただし、「若無大丈夫気概、退歩知非」は、若し大丈夫の気概無ければ、退歩して非を知り」とあったのを、本文のように変えた。
(48) 市川氏は「古徳曰く、但だ事の上に於いて無事に通ぜば、見色聞声、聾することを用ひず、と。」（書、答宗直閣）、「永嘉の曰く、無明の実性即仏性、幻化の空身即法身、と。是れ真語、実語、誑、不妄等の語なり」（書、答汪内翰）、「思量せんと要せば、但だ思量せよ、思量すべき時にも又敢えて思量せずんば、是れ特に天理に逆らひ天性を滅せんと欲するなり。」を引くが、いずれもよく分かりにくい。前引書、一六七頁
(49) 石井修道「訳注『大慧普覚禅師法語〈続〉』」四九頁
(50) 大正大蔵経四七巻 九五三頁
(51) 石井修道『大乗仏典・十二・禅語録』解説、四五九頁
(52) 大正大蔵経四七巻 九五三頁
(53) 大正大蔵経五十一巻六四九頁b
(54) 石井修道『大乗仏典・十二禅語録』解説、四六〇頁
(55) 石井修道『中国禅宗史話』四八八頁以下
(56) 大正大蔵経四七巻 八三六頁c
(57) 市川白弦、前引書、一六八頁
(58) 『大慧書』前引書、四九頁
(59) 石井修道『道元禅の成立史研究』三二〇頁
(60) 『大慧書』前引書、二一六頁以下
(61) 石井修道『道元禅の成立史研究』二五七頁以下、二九七頁以下、

三節

(62) 石井修道『道元禅の成立史研究』六六八頁
(63) 柳田聖山『初期禅宗史書の研究』一七一頁、一七三頁
(64) 『小室六門』の一つ。馬祖系と伝えられるが、柳田氏は、牛頭系の伝えるものと見る。
(65) 石井修道『道元禅の成立史研究』四七六頁、六二六頁など
(66) 「大慧普覚禅師法語」（『大乗仏典・十二・禅語録』二一二頁a
(67) 古賀英彦編著、（思文閣出版、1991）
(68) 「雲門広録」大正大蔵経、四七巻五五九頁a
(69) 「雲門広録」大正大蔵経、四七巻四四八頁。なお、この雲門の出典については、村上俊氏に教示をいただいた。
(70) 『趙州録』秋月龍珉四〇頁（筑摩書房、1972）
(71) 「大慧法語・示智通居士」市川白弦、前引書、七六頁